

使徒の働き4章23-37節 「一致にある力と愛」

1A 祈りによる力 23-31

1B 仲間への報告 23

2B 神中心の祈り 24-31

1C 創造主 24

2C みことば 25-26

3C 神の予定 27-28

4C 従順の力 29-30

3B 聖霊の力の更新 31

2A 互いの愛の一致 32-37

1B 使徒たちの管理する財産共有 32-35

2B バルナバの慰め 36-37

本文

使徒の働き4章を開いてください。私たちは前回、4章22節まで読みました。その続きを見ていきます。ペテロとヨハネが、ユダヤ人の議会、最高法院(サンヘドリン)に連れて行かれました。生まれつき足の利かない男が、イエスの名で立ち上がらせたことで、問い質されたのです。そこでペテロは、大胆にイエスの御名を宣べ伝えました。そして、彼らは二人を脅しました。イエスの名によって、かたることも教えることも、一切してはいけないと言ったのです。けれども、ペテロは、神に聞き従うことよりも、人に聞く従うことが、神の御前に正しいことなのか、判断してくださいと言いました。それで彼らはさらに脅して、釈放しました。

23節以降は、その後の出来事になります。4章後半で繰り返して出てくるのは、「一つになる」という言葉であります。心をつつにして祈る。一同が聖霊で満たされる。また、心と思いをつつにして、財産を共有するなどです。一つになっているところにある、神の力と愛がテーマです。

1A 祈りによる力 23-31

1B 仲間への報告 23

²³ さて、釈放された二人は仲間のところに行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。

ペテロとヨハネの二人が、「仲間のところに行きました。そして、残らず、彼らに祭司長たちや長老たちが行ったことを残らず報告しています。彼らは使徒たちです。イエス・キリストからの全権が任せられています。しかし、彼らは報告をしているのです。それは、「仲間」であるからです。この

「仲間」がいるということが、とても大切です。自分が自分で動いているのではない、キリストのからだという仲間がいます。そこに、自分が使徒の賜物を受けていようと、他の兄弟たちと変わりなく、彼らに報告して共有しているのです。

ヨハネも、黙示録を書き記すにあたって、初めにこう伝えています。「黙 1:9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。」同じ仲間として奮闘しているのだよ、ということです。

このことによって、主にあって私たちは互いに守られます。仲間という中に自分を置き、キリストにある仲間に、神が権威と守りを置いておられることを知って、その中に隠れるのです。そうすれば、安心です。私たちはキリストがおられるのだから、独りで大丈夫なのだというのは、危険です。互いに、キリストにあって存在しているから、キリストの権威と守りを身にまとうことができます。

2B 神中心の祈り 24-31

1C 創造主 24

²⁴ これを聞いた人々は心をつにして、神に向かって声をあげた。「主よ。あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。」

ここから、彼らが神に対して声を挙げています。これが、教会にとっての最大の武器です。今、彼ら教会の存在意義が脅かされています。主イエスを証しすることが、教会の存在意義です。それを、やめなさいと当局から脅かされています。そこで、彼らはおびえて、戸を閉めて、静かにしていることもできるでしょう。今の時代ならば、逆に表に出て、信教の自由が脅かされているのだと言って、政治的に声を挙げることもできるでしょう。けれども、彼らは知っていました。祈ることこそが、最大の武器であるということです。

そして、「心をつにして」声を挙げていますね。私たちが、祈る時に一人一人が祈ることも大切ですが、仲間として心をつにして祈ることはいかに大切かしれません。イエスが、弟子たちに教えられました。「マタ 18:19-20 まことに、もう一度あなたがたに言います。あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。20 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」有名な、イエスのみことばですね。

けれども、この約束の前に、教会に大きな権威が与えられていることを語っておられます。「18:18 まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。」教会で共に祈る時には、その地上

で行っていることは、天においてもその通りになるということです。つまり、祈りは地と天をつなぐ力を持っているということです。

そして、次に大切なのは、彼らは、誰に祈っているかをはっきりとさせたことです。「あなたは天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造られた方です。」ということです。これは、詩篇 146 篇 6 節にある言葉です。この世に生きていますと、神が造り主であられて、すべてを支配する王であられることを見失わせてしまうもので満ちています。自分の目の前にある問題を、すべてを支配する神に投影させてしまいます。私たちの住んでいる地球よりはるかに大きい太陽も、自分の目の前に十円玉を当てると見えなくなるように、神の栄光が見えなくなるのです。それで、祈る時に誰に祈っているのかをはっきりさせるのです。

2C みことば 25-26

²⁵ あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ、異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの国民はむなしいことを企むのか。²⁶ 地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか、主と、主に油注がれた者に対して。』

私たちは、使徒の働き 1 章において、ペテロが、ダビデの詩篇など、みことばを引用して、イスカリオテのユダに代わる使徒が必要であることを語りました。「1:16 兄弟たち。イエスを捕らえた者たちを手引きしたユダについては、聖霊がダビデの口を通して前もって語った聖書のことばが、成就しなければなりませんでした。」ここでも同じですね。これは、ダビデによる詩篇第二篇の言葉ですが、聖霊によって語ったということを告白しています。

そして祈りの中で、神のみことばを持ち出していることはとても大切です。イエスが、悪魔から誘惑を受けられた時も、みことばを引用されて、サタンに立ち向かっておられました。エペソ 6 章の、霊の武器についても、御霊の剣が神のみことばであることをパウロが語っています。

3C 神の予定 27-28

²⁷ 事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、²⁸ あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。

詩篇第二篇は、終わりの日、ハルマゲドンの戦いで国々が、神とメシアに対して王たちが相ともに集まって戦うことを示しています。けれども、彼らは今、自分たちの置かれている状況に、霊的には当てはまります。ユダヤ人の王と呼ばれるヘロデ、そしてローマの総督ピラトです。イエスに敵対する動きの中で仲良くなっています。「ルカ 23:12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。」

そして大事なのが、この出来事が、「あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていた」ということです。すべては神の御手の中で起こっていて、ご自分の目的のために動かしておられるのです。今も、当局がイエスの証しのために反対しているが、これもまた、神の想定内にあり、神が予め定めておられるご計画の中で起こっていることだ、ということです。このことを知るのは大事ですね、神は起こっていることに驚かれません。すべて想定済みです。

4C 従順の力 29-30

²⁹ 主よ。今、彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください。³⁰ また、御手を伸ばし、あなたの聖なるしもべイエスの名によって、癒やしとしるしと不思議を行わせてください。」

ここでようやく、彼らは願いを言っています。哀願しています。私たちはとにかく、願いから神に申し上げますが、呼びかけて、神がどのような方なのかを知り、また御言葉によって神のご計画を知り、その上で祈ります。

さらに、願いが、神中心になっています。脅かしがなくなりませんようにとは祈らなかったのです。イエスでさえが、神の予知と予定によって、苦しみを受けられました。同じように、彼らの祈りはイエスが命じられたこと、福音を宣べ伝えることを行えるようにという祈りを献げました。みことばを大胆に語らせてくださいと祈り、それから癒しやしるしや不思議を行わせてくださいと、主に命令されたことに従うことができるようにと祈っているのです。

私たちはいかに、状況からの救いを祈ってしまっていることでしょうか。そうではなく、たとえ状況が悪くとも、その中で主のみこころを行うことができるようにと祈ることが大切なのです。

3B 聖霊の力の更新 31

³¹ 彼らが祈り終わると、集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出した。

これはすごいです、五旬節の時の聖霊降臨と似たような現象が起こっています。2章では、激しい風が吹いてきたような気響きがあり、炎のような舌が分かれて現れましたが、ここでは場所が揺れ動いています。これは、ユダヤ人にとっては、シナイ山のことを思い起こさせるものですね。火の中に主が現れ、地震もあり、地は震えました。その中で主のことば、十の戒めが与えられましたが、彼らは今ここで、神のみことばを大胆に語り出しています。

このようにして祈りによって、聖霊の力強い働きが継続するのです。五旬節に起こったことがそれだけのことで終わりなのではなく、主が継続して聖霊の働きをしてくださることを示しています。

2A 互いの愛の一致 32-37

1B 使徒たちの管理する財産共有 32-35

³² さて、信じた大勢の人々は心と意思を一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。

彼らが心と意思を一つにしたのは、祈りだけではありませんでした。聖霊が力強く働かれる時に、一つになった祈りもありますが、互いに分かち合って、物も共有するということが起こります。始まったばかりの教会は、一切の物を共有するようになっていました。「2:44-45 信者となった人々はみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては、それぞれの必要に応じて、皆に分配していた。」とありましたね。彼らは、ますますそのようにしていったようです。

ただ、これが後々に問題を引き起こしています。次の章ではアナニアとサツピラの偽善の問題もあり、6章では、やもめの配分で不公平が出てきました。後に飢饉が起こって、ユダヤに住んでいる兄弟たちが困窮したことが10章29節にあります。そして、使徒たちの手紙を見てみると、信者たちの善意に頼って、仕事をしないでおせっかいをしている者たちが現れていて、使徒たちは、強く戒めています。パウロは、仕事をしない者は食べるなとまで言っています。

このように、必ずしもすべての物を共有することが正しいではありません。けれども、分かち合っていくことによって、心と意思が一つになっていることを示していくのです。私たちは、多くの時間を共に過ごすことが大事ですね。そして、そこにある必要を互いに満たしていくことが必要ですね。そして私たちが一つとなって、周りの人々、また遠くにいる人々のために支援を送ることもできます。そういった共同作業の中に、愛の実践があるのです。

³³ 使徒たちは、主イエスの復活を大きな力をもって証しし、大きな恵みが彼ら全員の上にあった。

足なえの男が起き上がったように、主イエスの復活が大きな力をもって証しされていきました。さらに、「大きな恵みが彼ら全員の上にあった」とあります。大きな力だけでなく、大きな恵みがありました。恵みは、受ける者たちが受けるに値しないものを、主が一方的にくださっている状況です。その証拠に、「彼ら全員の上にあった」とあります。すべての人が漏れることなく、神の恵みを受けているのです。

³⁴ 彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった。地所や家を所有している者はみな、それを売り、その代金を持って来て、³⁵ 使徒たちの足もとに置いた。その金が、必要に応じてそれぞれに分け与えられたのであった。

地所や家を打って、代金を持ってきているのは、そこに乏しい者がいなくなるようにするためです。

これは神の共同体にとって、あり得るべき姿です。パウロが、コリント第二でこう言っています。「8:14-15 今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。15 「たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった」と書いてあるとおりです。」これは、イスラエルの民がマナを集める時に起こった現象です。多く集めた人も、そのために少なく集めた人も、結局、同じ分量になりました。それと同じように、私たちが分け与えることによって、人々に恵みがとどまり、乏しい人たちがいなくなるのです。

そして、このことが、「使徒たちの足もとに置いた」とあるように、使徒たちの管理によって行われていました。しかし、先ほども言いましたように、この体制に問題が生まれました。それで、この管理を他の、聖霊に満たされた兄弟七人に任せるようになっていきます。

2B バルナバの慰め 36-37

³⁶ キプロス生まれのレビ人で、使徒たちにバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、
³⁷ 所有していた畑を売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。

こうした、心を一つにして、財産を共有していく中で、主に用いられる器、バルナバが登場します。使徒の働きの中でとても重要な務めにつきます。

まず、ここで彼を登場させたのは、5章に出てくるアナニアとサツピラと対比するためです。所有のものを一部自分のものにしていたのに、すべてだと偽った彼らに対して、バルナバは、真実に代金をすべて使徒たちの足もとに置きました。

次に彼は、「キプロス生まれのレビ人」とのことです。キプロスは、地中海に浮かぶ島ですが、パウロとバルナバがアンティオキアの教会から遣わされて行く初めてのところが、キプロスです。バルナバは、離散しているユダヤ人の家系から出ています。けれども、エルサレムにも親戚がいます。その第一回の宣教旅行で、バルナバはマルコを連れて行きます。マルコは、コリント 4章 10節によると、バルナバのいとこです。そのマルコは、母がマリアと言って、エルサレムに家を持っていることが分かります(使徒 10:12)。ですから、離散の地の出身ですが、エルサレムに在住しているユダヤ人ということでしょう。

そして、彼はレビ人ですね。彼はレビ族であるにも関わらず、畑を所有しています。律法の中に、レビ人は相続地を持ってはならないという命令があります(民数 18:23-24)。キプロスに所有している畑があったのでしようが、バビロン捕囚から帰還したユダヤ人たちには、レビ族に対する所有禁止の命令が大して重んじられていなかったようです。

そして、バルナバは、ヨセフという名前であり、バルナバはあくまでも別称でした。使徒たちに、そう呼ばれていたのです。「慰めの子」ということですが、ここで見る彼の、惜しみなく与える愛の行いに、それが現れています。

彼がこれから行っていくことは、人々をつなげて、分かれているところを一つにし、平和を造っていく働きをしていくからです。異邦人のための使徒として召されたパウロを、教会の中に紹介していくことです。9章で、パウロは、キリストの弟子たちを激しく迫害する人でしたから、回心しても、信じないで恐れていました。けれどもバルナバが、パウロに起こったことを説明して、彼を兄弟として受け入れることができるようにしました。11章では、アンティオキアに主を信じる者たちが起こされていること、異邦人にも救いが起こっていることを聞いて喜んで、エルサレムの兄弟たちはバルナバを遣わします。そしてバルナバは、その時には故郷タルソに戻っていたパウロを連れ出して、アンティオキアで働きに従事できるように助けたのです。そして、第一回宣教旅行で、バルナバとパウロが遣わされます。

彼がそのような働きができたのは、とりもなおさず聖霊に満たされた人であったからです。11章24節に書いてあります。「彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。」

このようにして、一つにされているところに私たちは、神の力と愛が満ちあふれることがわかります。心をつにして祈ること。そこに聖霊の力が注がれました。しかも、その祈りが自分たちのことではなく、神のみこころを行うことができるようにという願いでした。そして、すべてのものを共有して、すべての人が大きな恵みを受けることができるようにしていました。このようにして、五旬節での出来事が、五旬節だけに終わるのではなく、断続的に聖霊の満たしによって続いていくのだということです。御霊によって、新たにされ続けることが必要です。